

むかしの言葉を 短歌のなかで

永田 紅

「動態保存」という言葉をはじめて知ったのは、短歌の座談会だった。歌人の高野公彦さんが、「歌人は、昔の言葉を動態保存する」とおっしゃったのである。蒸気機関車などは停めた状態で保存（静态保存）するだけでなく、大井川鐵道のように実際に走らせながら保存することで、本来の用途や動きの様子を目の当たりにすることが出来る。そんなふうには、日本の古い言葉も、短歌のなかで実際に使われながら保存されてきた、というのである。

博物館に陳列されている昔の道具を見て、「これ何に使うもの？」と思うことがある。昨年の正倉院展で見かけた「白銅剪子」は、剪定はさみのような、でも先端の刃部分に半円形の壁がついた不思議な形。説明によると「灯明の芯切りはさみ」とのこと。円形に合わる壁のおかげで、切り取られた芯の残片が落ちない仕組みになっている。へえ、面白い。私はこんな道具を使ったことがないから、想像もつかなかった。物として残っていても、いったん使用が途絶えると、用途不明になる。洗濯板や石臼などは、使用経験がなくても知識としてわかるが、しかし実際の使い勝手や手応えを私は知らない。「なる」「きこはし」「なづき」「かひな」「あはひ」「なづび」。こんな言葉たちを、いま短歌や俳句以外で目にすることはほとんどないだろう。それぞ

プロフィール
1975年滋賀県生まれ。歌人。京都大学特任助教（細胞生物学）。京都大学大学院農学研究科博士課程修了。12歳から作歌を始める。歌集に『白輪』（砂子屋書房）、『北部キャンパスの日々』（本阿弥書店）『ぼんやりしているうちに』（角川書店）、最新歌集は2018年9月刊行の『春の顕微鏡』（青磁社）。エッセイ集に『家族の歌』（共著、文藝春秋）がある。父・永田和宏、母・河野裕子、兄・永田淳も歌人。歌壇賞（1997年）、現代歌人協会賞（2001年）、京都府文化賞奨励賞（2013年）等を受賞。

れ、「地震」「階」「脳」「腕」「間」「薔薇」。「汝（な）んぢ、なれ、な」や枕詞「あかねさす」「ひさかたの」なども短歌特有の言葉である。辞書のなかに鎮座しているだけではなくて、現代短歌のなかでも目にする。古い言葉を使って古めかしい短歌を作るわけではない。古い言葉も使って、現代を詠むのである。そこには、ただ「地震」や「間」と表現したとき以上の、厚みやふくらみが加わる。意味だけではない、言葉のもつ佇まいや歴史。古い言葉が、生きて、動いて、運用されている。

サキサキとセロリ噛みいてあどけなき汝を
愛する理由はいらす

佐佐木幸綱

物は、使うことで消耗や故障といった問題が起こるのを避けられない。しかし言葉は、使えば使うほど残る。本来の意味から転じて、変わってゆくことはあるにしても。

そして短歌は、感情や記憶をも動態保存する。歌一首を作ることで、何もしなければ流れ去ってしまう「その時」を短歌の器のなかに保存し、日常の諸場面で思い返し、味わい直し、力にすることが出来る。自分で作った歌でなくとも、誰かの歌一首を知っている、それだけで人生ゆたかなものである。

月刊 みんぱく

4月号目次

- | | | | |
|----|---|----|---|
| 1 | エッセイ 千字文
むかしの言葉を短歌のなかで
永田 紅 | 12 | みんぱく Information |
| | 特集 みんぱくの収蔵庫 | 14 | 想像界の生物相
カチーナ人形
伊藤 敦規 |
| 2 | 収蔵庫再編成とその舞台裏
園田 直子 | 16 | 新世紀ミュージアム
台湾客家村のエコミュージアム
河合 洋尚 |
| 4 | 安定した収蔵環境を保つための工夫
河村 友佳子 | 18 | シネ倶楽部 M
聖化に憧憬する心、俗世で生きる勇氣
——「修験 羽黒山秋の峰」
劉 高力 |
| 5 | 資料の収納・保管に用いる材料
橋本 沙知 | 20 | ながなんぢや
俺はシッセイ、お前はカンセイ
桜木 真理子 |
| 6 | 民族資料の収納・保管
和高 智美 | 21 | 次号予告・編集後記 |
| 8 | 外から見える収蔵庫
末森 薫 | | |
| 9 | ハイブリッド型保管庫「多機能資料保管庫」の登場
日高 真吾 | | |
| 10 | 〇〇してみました世界のフィールド
ハンターとともに走る
池谷 和信 | | |